

ヤンデレストーカー丸  
山姉貴

さよぽ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アイドルだからってストーカーは犯罪だからな！

# 目次

ヤンデレストーカー丸山姉貴 | 1

S系な白鷺姉 | 7



# ヤンデレストーリーカー丸山姉貴

「えへへいい写真撮れちゃった♡

そう一人でつぶやくのは丸山彩 大人気アイドルバンド「Pastel Palette」ボーカルだ

彼女の部屋は想いを寄せる彼の写真で埋め尽くされている

中学2年の時クラスと一緒にになり出会った。彼の正義感が強い所に惚れ、高1の時にその想いを彼に言った

しかし先客がいたみたいだった。それから丸山は盗撮やストーリーカー行為をするようになった

大人気アイドルがこんなことをして大丈夫なのかと思うだろうが裏で謎の力が動いているらしい

彼は起きた。そして丸山も起きていた

丸山は1ヶ月間彼が起きる時間を記録していたて平均6:30に起きることがわかつた

8:10

彼は準備をして家を出た

丸山も家を出た

彼を尾行しながら登校する丸山　それに全く気づかない彼

丸山は尾行しながらカメラを回したり写真を撮ったりしている

もしバレたとしてもまたまたと言えればいいし、彼と話す時間もできる。

丸山は彼と話す時や彼の近くにいる時が一番幸せでそれ以上は求めなかった

校門前　風紀委員が挨拶運動をしている

彼が先に風紀委員の氷川紗夜に挨拶をする

いつも真面目な氷川は彼と話すときはとても落ち着いて話している

なぜか妬けてしまう丸山

「おはようございます。丸山さん」

「おはよう紗夜ちゃん！」

### 放課後

今日はパスパレの練習がある。　　パスパレの練習は一回家に帰ってからが多いがたまたま学校から直でいかなければならない時がある。今日ははとも憂鬱だ。

彼も今日は彼女と約束があるらしい

丸山は一回彼の彼女について調べてみたことがある

近くの高校に通っている青葉モカという子らしい

高校1年生で1つ年下だ。その子もバンドをやっているらしく　ライブをするライブハウスも同じ所を使っていることがわかった。「年下が好きなんだ」

こっそりデートにもついて行ったことがある

その子はねずみ色の髪色でおっとりとしていた

彼も丸山という時よりその子という時の方が楽しそうだった

丸山は彼が楽しんでる顔を見ると落ち込んでしまう

あの笑顔を見るとあの時の言葉が頭の中に出てきてうずくまってしまう

「やっぱり私だめだな」

「ハア」

「どうしたの彩ちゃん？ため息なんかついちゃってなんか嫌なことでもあった？」

話しかけてきたのは同じバンドメンバーの氷川日菜

「なんでもないよ」

「まさか 好きな人ができたとか？」

「えっ！ いやつちが！ そ、そんなんじゃないから!!」

「うゝむ、これは凶星とみた なゝんてね」

「もう！ からかわないでよ！」

## 夜

パスパレの練習も終わり家に帰る。彼は帰ってきて何をしたのか早く見てみたい

「ただいま〜」

すぐに靴を脱ぎ 駆け足で自分の部屋へ行く

「お帰り彩、ご飯できてるから」下から母が言ってきた

「わかった」と適当に返事をしてパソコンを操作する

彼は16時半までには戻ってくるが今日はあの子との約束があるから遅くなるかもしれない

一応16時から見てみた。彼はあの子を家に連れていた

丸山は見るのをやめようか迷ったが見続けた

だんだん見ていくと彼はあの子のものを撫でたり、胸を触ったりしていた。あの子も

嫌がっていなかった

丸山もまさかとは思ったが見続けた

それからしばらくして彼とあの子はキスをしてしまった。それもとても長くお互

い抱き合いながら

丸山はもう確信した。泣きそうになったが見るのをやめない。

心の中でついていけない自分と見続けたいと思う自分がいた。

彼は裸になりあの子も裸になった

そして彼はその子とやってしまったのである

それを見終わる頃には丸山は息が荒くなり心臓が口から出てしまうほどドキドキしていた

今日はお風呂に入って寝た

人は衝撃的なことを2度受けるとおかしくなってしまうのだと丸山は思った。

## S系な白鷺姉

「ワンワン！」 3回だよ3回（幻聴）

私の飼い犬レオンが吠える

今は朝の散歩に来ている

気持ちがいい朝の日差しに照らされながら公園を歩いていた

「そろそろ帰ってあつちの世話もしなくちやね」

ガチャ

「ただいま いい子にしてた？」

そう問いかけるのは幼馴染の彼 昔から弟のように可愛がっていた。

最近忙しくなってきた彼と関わる機会も減っていった

そして彼が私を飽きてしまわないように彼にとって私は特別な存在であるために監視してしまった

彼には犬同然の生活をしてもらっている

四つん這いで歩かせ、裸で過ごさせ、首輪も付け、「ワン」としか喋らせないようにしている

散歩も行かせる。真夜中の誰も通らない道を歩かせる。

最初は嫌がっていた。無理矢理出ようとしたり助けを呼ぼうとしたり。それでもだんだん慣れてくれた。

「そこは狭いでしょ 出て来なさい」

彼はいつも小さい犬小屋で過ごさせる

「はい、今日のご飯よ」

そう言つて私はドックフードをおわんの中に出した

今までふつうのご飯を食べさせてきたが犬が人間の物を食べるなんておかしいから今日から変えることにした

彼はとても嫌そうだ

「何しているの？早く食べなさい」

そう言っても食べてくれない

「もう！自分で食べないなら食べさせてあげるわ ほら お口を開けて」

私は強引に彼の口の中にドックフードを入れて飲み込ませた

それを何回も何回も何回も

彼はお腹を抑えながらもがいている

吐いてしまった

さつきまで食べていたものを全部

「もう！なんで吐いてしまうの！」

私は彼に平手打ちをした

彼は倒れこみ泣いている

「ちやんとご飯を食べられなかったお仕置きよ」

私は彼の足と手を縛り目隠しをさせた

「これで明日まで過ごすのよ」

そう言っつて私は部屋から出ていった

午後からはパスパレの仕事が入っている 私は準備をして家を出た

彩ちゃんは彼のことをすごく心配している

彩ちゃんが多分彼のことが好きなのである

それまで彼を一番好きなのは私 幼馴染であり 彼とずっと一緒にいたのも私

私が彼にとつて一番であり続けなきやいけない存在なのだ

彼に他の女がつかようようにしたのも監禁した一つの理由

彼が他の女に目移りしてしまうと私が一番ではなくなってしまうから

夜

やつぱり彼に酷いことをしてしまったと思ひ私は彼の手足についていた紐を解いた  
彼は縛られた疲れなのかグダツとしてしまった

私は彼を抱きかかえてお風呂場へ向かい体を洗ってあげた  
あんな汚れた薄暗い所に数週間もいたのだからとても汚れていた

彼を洗っているとしたの突起物が気になった

「やっぱり男の子なのね」

そういつても彼を気持ちよくさせて今日は一緒に寝た